

仕事でもカウンター係のお二人さんのまとめによると、ワースト1：プラスチックの袋・破片ノ八十二、ワースト2：食品の包装・容器類ノ八十、ワースト3：フタ・キャップノ六十九、ワースト4：発泡スチロール破片ノ四十二、ワースト5：ペットボトルノ三十一、とのこと。他には、雑貨、履物、木片、配線被覆（ホース）、紙製容器、ビン、缶、硬質のプラスチック容器や破片などなど。ワースト5圏外ながら数量が多い品目が続出。大小様々な袋類もかさばる要因だった。ロックアイスの袋、お米の袋、園芸用肥料の袋・・・ゴミ袋として再利用してもよさそうである。

データ送信は、弥生が一手に担当する。テンプレートをバージョンアップしたとかで、その試行も兼ねて、というのがポイントの1。データカード既定以外の頻出品目（ホース、木片など）を予め候補登録しておいたというのがポイントの2。そして、今回からはこの結果が `ngata@j` 流れることになっている。ポイントその3である。

冬木は業平が操作するのを横から見ている。ゴミを拾うだけでなく、それを調べて、しかもケータイで結果を共有し合う・・・入力画面にも感嘆していたが、その一連の流れ、その意義に感服の度を深めたようだ。企業の社会的責任 CSRレポートに出てくる社会貢献活動では、せいぜい「拾ってキレイにして」どまり。いわゆる美化清掃レベルである。調査して、それを次に活かす、といった取り組みをしている企業はあっただろうか。少なくとも自分が担当している中ではなかった気がする。冬木は七月に所属が変わり、CSR担当から情報誌担当に。仰せつかったのが荒川流域の「大人のための」フリーマガジンだとか。聞けば長くなりそうだが、その辺の経緯については追々本人から話が出るだろう。

前回は無念のバッテリー切れで試し損なった八広は、ここぞとばかりにデータ入力画面を試用中。開発者の弥生から直々の指導を仰げる、というのはせめてものお慰みである。そんな彼氏を見て彼女はご機嫌斜め？ いやいや、櫻とのおしゃべりに夢中でそれどころではないようだ。

南実もケータイ所持者だが、ここは本業が優先。名無し草の束が乾いて来たのを見届けるや、早速粒々の研究に着手する。もともと孤高なところがあるが、これをやっている時はその傾向が強くなる。京みやじが傍で見学しているのも気付かない没頭ぶり。こぼれ落ちた粒かけらや欠片を掬っては、千歳が持ってきた空のバケツに移す。水はあとで注ぐようだ。

「その緑色の細長いのもって、人工芝？」

「ああ、京さん・・・ええ、劣化すると、この有様です。河川敷のスポーツ施設で使わ

れているものが発生源としては大きいんですけど、百円ショップで売ってるのがありますよね。あれがそのまま河原にポイ捨てされることもあって、そついうのも混ざってくるんだと思います。質がいいとは言えないからすぐとれちゃうんでしょね」

かくして、小松先生の小講座が始まった。「この粒々はアイロンを当てると溶けるので、動物クッキーを作る時の型なんかを使えば・・・」レジンペレットで工作ができることを知った京は、その色のついた粒々のいくつかを譲り受けることとなった。これぞリサイクル（再利用）、と言いたいところだが、レジンペレットはあくまで原料なので、工作で使われた時点で初めて製品化される。今回はリサイクルではない。妙な話である。

もう一人のケータイ所持者、初音嬢は携帯電話本来の機能を使っている。

「あ、店長、今日は午後一時からいいですか？ はい。昼食・・・あ、ありがとうございます」通話が終わると、今度は天気情報サイトにアクセス。自身の観天望気と照合したりしている。

その傍らには、集まったフタの銘柄チェック&選別に余念がない六月がいる。夏休み最後の日、想定通り、これでさらなる磨きがかかることになる。こうした熱心さは姉直伝のようにも見える。

この間、千歳と小梅は洗い場で仲良く(?)作業していた。

「隅田さん、櫻さんのどこが好き？」

思わず手が滑り、洗っていたペットボトルを落としてしまった。水が撥ねる。

「な、なんと?」

「櫻さんには先週センターで聞いたんだ」

「何て言っていました？」

「だから、答えてくれれば教える」

「そうだねえ・・・機転が利くところ、ひたむきなところ、それでいてお茶目で、あと

は・・・」ひと呼吸おいて、

「笑顔、かな」

「フーン、そうなんだあ」

当人は誰かさんみたいにクシャミーっ。

「あら、千住さん、大丈夫？ 花粉症だったりして」

「私、ウワサが絶えなくて、ホホホ」

三十男は、少女にいじられている。

「小梅さま、お約束の教えてよ」

「へへへ、ご本人からどうぞ！」  
「クーツ！」

すでに正午近く。再資源化に供するペットボトル、食品トレイ、ビン、缶は定番品だが、今回は新たに「廃プラ」も洗ってみた。専用袋はこれで満杯である。小梅は収集品であるプラスチックバットとゴムボールもひと洗いして、持って行く。向こうからは、バケツを持った南実、フタを盛ったカップめん容器を抱えた六月がやって来る。避けていた訳ではないが、今日は南実と話をしていない千歳。何となくうるめたかったが、すれ違いざま、南実がウインクするものだから、益々ドキリである。「見透かされた？」

少女はそんな千歳をからかう愉しさを知ってしまったようで、容赦ない。

「そうそう、櫻さんで眼鏡外すとスゴイ美人ですよ。知ってました？」

「眼鏡美人だとは思ってたけど・・・」

「楽しみが増えましたね。エへへ」

中学二年生ともなると、これくらいのことと言っているのけるのか、それとも姉がいると自ずとおませさんになるのか、本人に尋ねたところで教えてはくれないだろうし・・・

「初音さん、天気はこの後、どう？」

「パツとしないスね。でも、持ちそうです。ちなみに只今の気温は・・・」

千歳にはおなじみのデジタル温度計が出てきた。

「あーや、三十？」

折りよく陽射しも強くなってきた。これで資源系が乾くのも早まりそうだ。三十度というのを聞いて、グツタリしている三十男が若干名いるが、それはご愛嬌。ここらで再びタイムキーパーの出番である。

「では、乾かす必要がないゴミは不燃と可燃に分けて、袋詰めします。それが済んだら解散にしましょ」

千歳は袋詰めされる前に、スクープ系の続きを撮る。枕、すだれ簾、懐中電灯、ぬいぐるみなど、干潟に漂着している現場げんじょうを押さえたものが多かったが、この臨時集積所で新たに、洗剤とデッキブラシ、チリトリ、卓球ラケット、冷却マットを見つけた。スクープというよりも掘り出し物である。

業平は何を思ったか、廃プラの中から「プラ」の識別表示が付いている容器包装類をピックアップし出した。まだ乾ききっていないが、構わず別のレジ袋に入れている。「ちょっとね。実験用に頂戴します」この手のプラ包装は、ケミカルリサイクルで油に戻せる訳

だが、原料化（油化）される前にまだお役に立つなら、「プラ」としても本望だろう。彼の実験では、バーコード部分がカギになるが、変形してたり破れてたり、イレギュラーな方がスキヤナの試し甲斐があるとのこと。冬木は「おそれいりました」と一言。一同同感である。前回は缶を叩いていたルフロンは、今回はペットボトルに着目。乾燥中の何本かを拾い、その辺に転がっていた細長い木片を手にすると、即興で叩き出した。缶と違って、大した音階は作れないものの、弾力のある乾いた音が鳴り響く。相変わらずリズム感はバツチリである。

「これで打楽器作っちゃおっか。ねえ？」

フタを洗って戻って来た六月は頷きながら、別のボトルどうしをぶつけ合って、ポンポンやっている。何とも長閑なひとときである。

自由研究デーの時はそれほどでもなかったが、初音はお姉さん方に興味が沸いて来た。櫻、南実、弥生の三人については、興味も然りだが謝意の方が強いかも知れない。だが、この舞恵姉さんは、初対面ということもあるが、何とも摩訶不思議でとらえどころがない。言葉遣いが多少乱暴なところは、初音にも通じるころはある。だが、ノリがいい割には愛想が良くないってのは、どう考えればいいのか。

そんなこんなで、袋に詰め込む作業に従事しているのは、櫻を筆頭に、八広、冬木、小梅、途中から千歳、初音、そして「じゃ、わたくしも」千歳から軍手を受け取り、最後に京が加わった。南実はまだ洗い場にて微細系の浮沈検証を続けている。京に渡すレジンペレットを選び分ける手間が加わっている分、時間がかかる。

「季節柄、花火とか出てくるかと思っただけど、見当たらんんだねえ」とは八広。

「花火ねえ・・・」南実のセリフを櫻は思い出している。

「八月は夜もずっと暑かったからさ、花火どころじゃなかったんよ」と舞恵が返す。

「ところで、この草の束はどうするんですか？」冬木が口を挟む。

「このままでいいんじゃないでしょうか、ね？」石島さん「千歳は、母と長女に振る。

「そうですね。一応、伝えておきます」母、いや妻が答える。

このまま乾燥させて軽くなれば、処分しやすくはなるだろうが、今回の量からして、そこまでは手が回らない。再資源化分を除き、詰め込んだ袋の数は、可燃が一に対し、不燃は四つ。廃プラを別枠にした上、防流堤より奥のゴミを見送ってもこの数である。人数が多いと収集数も比例して増える、ということか。

こういう状況になった時、いつものなら櫻が「ジャン」とかやりそうだが、今日は特に「いいもの」の用意はなかったようだ。「ハハ、どうしたものか・・・」しかし、いいも

のは誰が持って来るかわからないものである。おもむろにセミシヨルダーをガサゴソやっていた初音は、

「このシールを貼るのだ！」

取り出したるは、河川事務所お墨付きのステッカーである。これには母、妹も含め、「おあ！」である。

「この間の増水の時、建設省の古看板が流れ着いたんだけど、回収できなくてそのままお流れになっちゃったんよ。そのお詫びも兼ねて、って」

これを貼って所定の場所に出しておけば、「いつでもゴミ拾い」対象物と見なされ、河川事務所で引き取ってくれるんだそう。これはありがたい！

本来ならここで解散、となるのだが、発起人さんが「待った」をかけた。撮影しながら干潟をウロウロしている時に気になっていたことがあって、それを確認するんだとか。持って来ていた長靴に履き換え、洗い上げたペットボトル一つ手に、干潟へ下りて行く。よく見ると、川面には油膜のようなものが膜状に広がり、照り返している。ハクレンから出た脂という訳ではなさそう。とにかくこれが何かを検証するため、サンプル採水しようとの試みである。だが、長靴を履き慣れていない千歳は、着水したところでバランスを崩しかけ、「おっと」と周囲をあわてさせる。干潟には、姉妹、櫻、そして南実もいつしか下りていたが、このヒヤリを見て、業平と八広が駆け寄る。

「隅田さん、まず水になじませてから」 南実のアドバイスにより、掬った水を振り混ぜ「同化」させる。「天然性の油分だとは思いますが・・・」 無事採水し、南実にペットボトルを渡そうとした時、不意に波が襲ってきた。今度は近くにいた姉妹が「おっと」となり、上から見ていた母は「気を付けてえ」と叫ぶ。水の事故というのはいつどんな形で起こるかわからない。だが、そんな母の心配を他所に、姉妹は打ち寄せる波を見てはしゃいでいる。

「ママは心配性、いや過保護なのよ」

親の想い、子知らず、である。

波が収まり、水位もぐつと下がってきた。干潟の全貌がこれで明らかになる。「待った」のおかげである。掃部先生の予想通り、大水による土砂の堆積が少なからずあったようで、幾分肥沃になった気がする。川も、そして干潟も、正にこの時を生きているのである。生きた教材は、自らの生き様を雄弁に語りかける。

土木作業担当の二人は、思うところあって、防流堤の更なる強化に乗り出した。これがど

んな働きを示すのか、来月の一大クリーンアップでの見どころがまた増えた。

各自ケータイで撮ったり、デジカメで記念撮影をしたり、今の干潟はこの上ない人気スポットである。集合時間からすでに二時間超が経過。振り返りつつも一行は、ようやく干潟を後にする。

ボラカスズキか、魚が跳ねる音が聞こえる。歓送の挨拶代わりらしい。

ゴミ袋は手分けして、自転車に積んだり、手に持ったりしながら、十二人で大挙して移動開始。グランドの詰所脇には、不燃の四つを預けた。スーパー行きも一旦ここに保管。可燃ゴミはいつものように千歳が引き取ることにし、廃プラは隣市に運ばれる。

今日はなかなか散会とならない。石島姉妹、六月、櫻の四人は、拾ったボールとバットで投打に興じる。業平と弥生はボケとツッコミのような会話の最中。当人達は真面目に議論しているつもりだろうけど、傍から聞いていると漫才である。高級感という点で共通する京と冬木は、思いがけない接点が発見し、会話が弾んでいる。

「・・・その本部のCSRを担当してたんで、あそこの複合型店舗にも行ったことはあります」

「あら、以前わたくし、衣料品部門で働いてましたのよ」  
八広と舞恵は聞き耳を立てている。

「小松さん、八月七日ってお誕生日だったんですって？」  
ようやく南実と話をする千歳であった。

「発信源は文花さんでしょ。たく、お節介なんだから」  
「おめでとございます、と言いたいところですが、遅いですよね？」

「当日ちゃんとお祝いしてもらいましたから。その節はありがとございました」  
やけに淡々としているのがかえって気になる。南実は続けて、

「八月は暑かったから、どうかしてたんですよ。ま、一時的な熱中症、てことで何とも意味深である。八月七日とはまた違う動揺を感じる千歳。策士南実は、動揺ならぬ「陽動作戦」に打って出た。櫻も千歳も術中に嵌りかけているのだが、そうとは気付いていない。

初音が店入りする時間が近づいてきた。櫻は今度こそ締めに入る。

「皆さん、今日はおつかれ様でした。今回の集計結果はメーリングリストに流れますが、これまでの成果をまとめたものも別途クイズ形式でお流しします。どうぞお楽しみに」

冬木は業平に小声で尋ねる。「メールングリストって？」 対する返事、「まあ、それも後ほど」。人の話は最後まで聞くものです。

「あと、これも [hogea](#) でご案内済みですが、明後日は夜、センターにいらしてくださいね。掃部先生との座談会がメインですが、千歳さんがさっき掬った水も調べようと思いますんで」 一同礼、そして、異口同音に「ありがとございました！」

「それじゃ、弥生ちゃん、また火曜日」

センターが扱っ情報のカギを握る、例の web プログラム、いよいよ大詰めを迎えていた。千歳にもできるだけ早く来てもらうことになっている。

「千さん、お手柔らかに、ね」

「そんな、僕は誰かさんみたいに鋭くないですから。それはこっちのセリフ」

弥生、六月、小梅とその母。四人おそろいで、そろそろと会場を離れる。そこを初音の R S B が、いつもの調子でバタバタとすり抜けて行った。母はレジンペレットが入った小袋を片手にお手上げのポーズ。そのお隣では、

「六月君、蒼葉さんのこと好き？」

「え、おばさんて？ ハハ（笑って）まかす」

「ヤレヤレ」 小梅もお手上げである。

アンテナは高いが、空気が読めない(?) 弥生嬢がここで揺さぶりをかける。「そうだ、蒼葉ちゃんに電話してみよ」

聡明な少年は、空気を読んで我慢の子と化す。不用意な反応は辛うじて封印。姉君も意地悪なものである。

ほとぼりが冷めたか、若い二人はまた仲良く会話を始める。

「小学校、最後の夏休み、どうだった？」

「ここに来たおかげで、チヨ一充実しました」

「でも、そのフタどうすんの？」

「とにかく提出、あとは先生と相談・・・ そっか、明日から学校かあ」

「ひ、永代先生によるしくね」

永代と書いて「ひさよ」。今は六月の担任の堀之内先生のことである。口にはしなかったが、二人の想いは同じ。「いつか先生をこの干潟に連れて来よう」 何を企んでいるのやら？

残ったオーバー25メンバー七人は名刺交換を始めていた。名前と顔はだいたいわかった

が、どこの何者かが冬木はよくわかっていなかったので、名刺というのは好都合だった。八広はフリーターの要素が強いものの、一応自作名刺は持っている。仕事を得やすくするための便法である。舞恵は、行員としての名刺ではなく、八広に作ってもらったという別の顔の名刺を配っている。「え、『自称 アーティスト』って、なーに？」 櫻は不思議がついているが、「ま、それはまた後でね」 やはり摩訶不思議な女性である。

出だしよりはおとなしくなったものの、冬木にはどこか曲者クセな印象がつきまとう。南実と名刺を交換したところで、一方的に話し込んでいる。口説くというと聞こえが悪いが、どうも彼女に気があるような口ぶりである。既婚者というのはハッキリしているので、南実も真に受けてはいないようだが、これで独身だったら考え物。当地は出会い系的な側面は確かにあるが、環境貢献の場というのが第一義であって、出会いを求めて来る場ではない。冬木の動機がいま一つ掴めない。本当に仕事絡みなのか。

メーリングリストの話題になったところをうまく遮り、南実は千歳にひと声。さすがに辟易してきたようだ。

「隅田さん、榎戸さんもメーリスに入れてもらえるのかしら？」

「そうですね。一応ルールがあって、それに同意していただければ可能ですけど。榎戸さんて、工作上、荒川とどんなご関係があるんですか？」

先の非礼に対する仕返しをするつもりはないが、リスクを未然に防ぐのが管理人の役目だとすると、ある程度の敷居は設けなければいけない。名刺を交換し、彼が流域情報誌の発刊にあたって情報収集していることを改めて確認する。中堅広告代理店、社会的起業部門のこの所属とな。

「地域といつか足元から社会を見つめ直す、そんなビジネスモデルを探るのが仕事ですが、もうちょっと緩やかな感じで情報誌が作れないかって。今日はその手応えを得ました」

御礼の言葉までは出なかったが、頭は下げてくれたので、まあここは信じるに足るか、と千歳は思う。

「了解しました。ちょっとお時間いただくかも知れませんが、いずれ流れると思います。アドレスは名刺に記載してあるのでいいですよね」

「あ、よろしくお願いします」

「業平とのアフィリエイトのお話とか、情報誌の詳細とか、お差し支えなければメーリングリスト宛に送ってくださいね」

千歳もかつては一介の企業人だっただけに、こういう時の会話はそれなりにビジネスライクだったりする。そうとは知らない冬木が恐縮するのも無理はない。南実はひと息つきながら独り言。「隅田さん、やっぱり似てる」 誰に？ 何が？ またしても意味深発言である。



この七人のうち、断煙中の業平をカウントから外すとすると、喫煙者は今二人。人数比的にはそんなところだろうか。一人はルフロン。もう一人が新参の冬木である。どちらともなく一服し始める。吸わない四人はちょっとギョツとするが、ここは干潟ではなく詰所の脇。ご丁寧に吸殻入れが置かれてあるんだから、仕方なかるう。だが、リーダーは何となく牽制球を放る。

「奥宮さんて吸う人だったんだ」

「ええ、吸う人が多い職場だから、自分で免疫作んなきゃいけないで、その・・・」  
ちよつと気まずそうだったが、ベースは無愛想なまま。

「そっか。大変なのねえ。ま、せめて干潟にいる時は呼吸器をリフレッシュしてあげてね」  
冬木はちよつとギクつとなっている。眼鏡の女性に対する恐怖症、という訳ではないだろうけど、櫻は手強い、という印象を持っているようである。これで櫻が眼鏡を外していたら、こういうアクションを起こしていたら。千歳はドギマギするやら、ホツとするやら・・・  
・ 予防という意味では、クリーンアップデーにおいても、八広と舞恵のように親密さをアピールした方がいいのだろうか。悩めるアラウンドサーティーなのであった。

午後一時をとつに過ぎ、各々空腹感から、ようやく九月の回の終了を悟るメンバーである。男女七人何とやらと云うが、この手の人物の組み合わせは、ついつい時の経つのを忘れさせるようだ。

「では、皆さん、今回は十月七日ですね。集合時間は・・・」

「九時がベストでしょうけど、十時で大丈夫」 南実がフォローする。

「ありがとう、小松さん。そついつこと！ あ、あと、明後日も」

櫻と南実のこのやりとりを見て、千歳が胸をなで下ろしたのは言うまでもない。

南実は、面倒なことになる前にと、そそくさと電動自転車で退散。見事に交わされた冬木は、「せつかなんで水辺を散歩しながら商業施設まで行って帰ります」と言い残し、トボトボと下流側へ。三十代半ばならではの哀感が漂つ、そんな後姿である。だが、頭の中はフリーマガジンのことではない。九月号（準備号）は先月中に出ているが、次の十月号は現在編集集中。何かを載せるには、ギリギリだがまだ間に合う。今回のクリーンアップの報告は勿論載せるつもりだが、次回予告も出せるのではないか・・・

いつもならここでまた一服と行くとこるだが、多ポケットの一つに手が伸びたところで止まった。「リフレッシュ、か」

カフェめし組は、業平、千歳、櫻、舞恵、八広の五人。全員自転車なので、すぐにでも着

きそうだが、千歳が先導なのでそうは行かない。八広がしびれを切らして先を急ごうとする。二十代半ばの後姿に哀感はなく、ただせつかな感じ。櫻はそれを見て、ビビッと来た。

「あ、思い出したぁー！」

その声に反応した訳ではないが、千歳はブレーキをかけ、

「じゃ、これ置いてから行くんで。櫻さんの分も預かりますね」

「ダメよ。袋片手じゃ危ないわ。私も行く！」

行き方がわかっていないのに八広は突っ走っていて、今頃急ブレーキ。戻ろうとしたら、業平が先を示す。千歳と櫻は堤防から下りて行った。

「あの二人は後で来っから。橋に出たら左折ね」

RSBが先導車となっからには、ピッチが上がる。前に行きたい舞恵のだが、ティアードのロングスカートでは思うようにスピードが出せない。「たく、二人とも速いよぉー！」無愛想なのは変わらないが、ちょっと愉しそつである。

© noma ogger